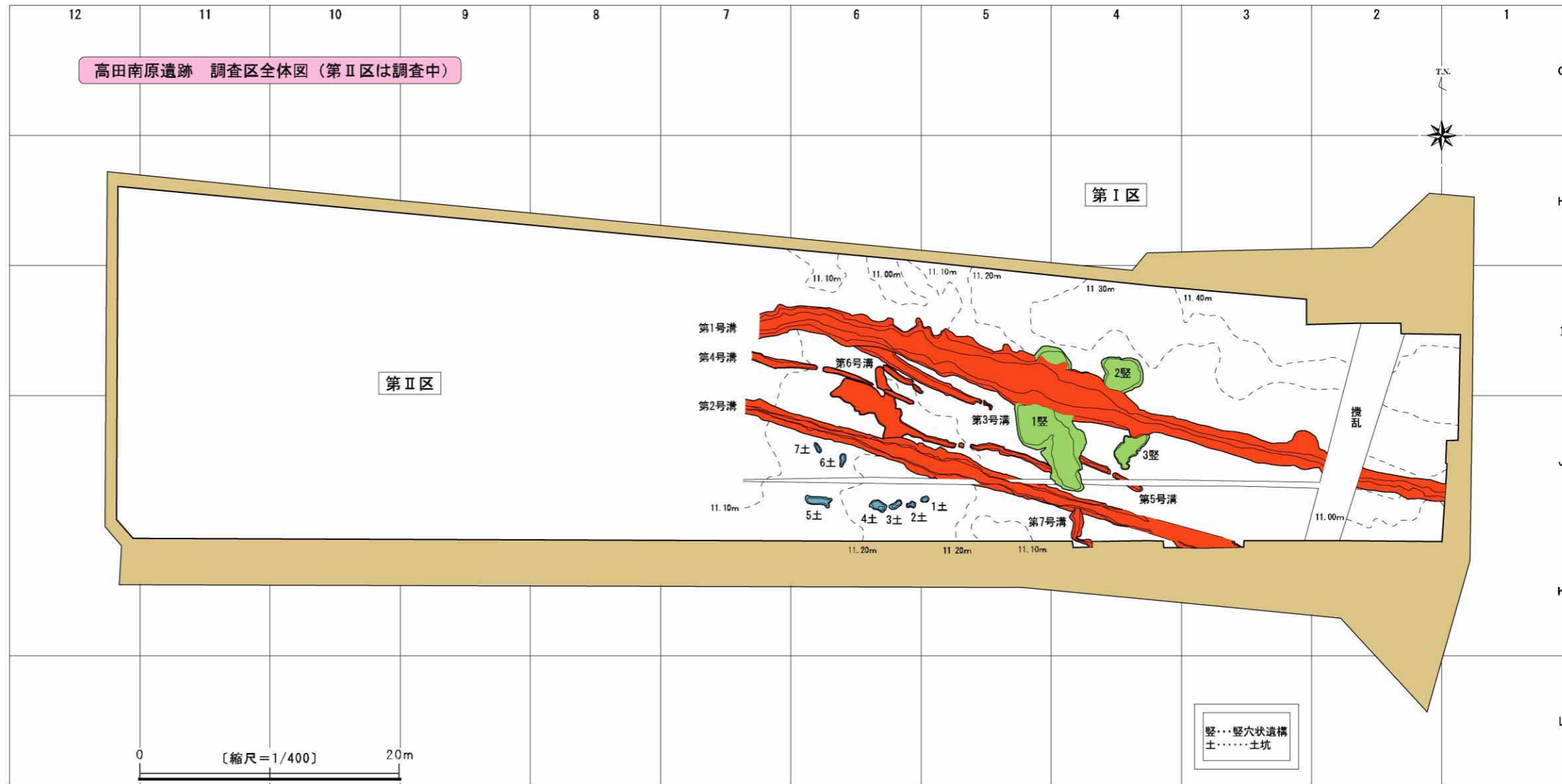




◇第Ⅰ区では、2条の溝が約8mの間隔をあけて発見されています。
 ◇第Ⅱ区では、溝の西側部分の様子が明らかになると考えられます。発掘調査を終了した後には、記録した図面や写真類の整理と出土遺物の整理・分析などを行います。その後、溝など遺構の機能や使用されていた年代などを決定しています。



◇高田南原遺跡は、標高 11m の低湿地遺跡です。今回の調査で発見された溝は、農耕に関する用水路であると考えられます。近くには湿地を利用した水田が広がっていたと思われます。◇溝の年代を知る手がかりとなる遺物は、第1号溝からは弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器が少量出土しています。第2号溝からは古墳時代後期の土器破片が多量に出土しています。土器の年代はある程度時間幅がありますので、出土品整理を行った上で具体的な時代を決定していきたいと考えています。◇調査成果としては土地利用の具体的な様子を明らかにすることができましたが、遺跡の全体像や周辺の集落との関係など検討が必要な課題も多くあります。



東側では、垂直に近い状態で打ち込まれた杭や板などが倒れるようまともまっています。堰のように水路の水を調節する施設の痕跡と考えられます。



調査区の中央では長さ約 1.5m の板材や細長い杭などが溝を横断するように出土しています。木製品は取り上げた後、乾燥しないよう水に浸けた状態で保管します。



底の近くから出土した鍬です。農耕具として弥生時代以降盛んに使われるものですが、溝の掘削や維持・管理などにも使用されていたと考えられます。



欠損しているため全体の形は不明ですが、田下駄が縦半分に割れているものと思われます。調査区からは約 650 点の木製品が出土していますが、鍬などの道具は僅かです。



溝の底からは、細かく割れた状態の土器(須恵器・土師器)破片が約 2400 点出土しています。古墳時代後期を主体にその前後の時期も認められています。